



続・やさしいイスラーム講座

～ムスリムに課された5つの行い～

- (1) 信仰告白
- (2) 礼 拝
- (3) 喜 捨
- (4) 齋 戒
- (5) 大巡礼

アッラーの使徒ムハンマドは、高弟の一人ムアーズをイエメンの総督として派遣するにあたり、以下のように命じられた。「おまえはこれから啓典の民の許に赴任するが、先ず彼らに、アッラーの他に神はなく、私がアッラーの使徒であることを説きなさい。そして彼らがそれを受け入れたなら、アッラーが1日に5回の礼拝を彼らに義務として課されたことを教えなさい。そして彼らがそれを受け入れたなら、アッラーが富裕者から喜捨を集め貧者に分け与えることを彼らに義務として課されたことを教えなさい。しかし彼らがそれを受け入れても彼らの大切にしている財産までも取り上げてはならない。また不正に苦しむ者の訴願を心して聞くように。彼らの訴願とアッラーの間には御簾の隔てはないのであるから。」(『日訳サヒーフ・ムスリム』第1巻40頁参照)

前編「やさしいイスラーム講座」では、ムスリム(=アッラーに服したもの=いわゆるイスラム教徒)が信じる六つのことについて解説しましたが、イスラームの信仰は信じることだけでは不十分です。信仰とは心の行為ですが、人は心と体から成り立っていますから、心だけでなく、それを体現する行為も欠かせません。それがイスラームの「六信五行」と呼ばれるものの五行、つまりムスリムに義務として課された五つの行です。この「続・やさしいイスラーム講座」では、その五行を一つ一つ順を追って解説します。なお、上記に引用の預言者ムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の言葉はこれらの義務が一度にではなく段階を追って教えられるべきことを示しています。



イスラームの信仰を建物にたとえるなら、五つの要の義務は建物を支える五本の柱に相当します。強固な建物には五本の柱が不可欠です。四方を支える四本の柱と、それらの支柱をなす五本目の柱です。それらの柱の一本でも欠ければ、建物は不完全で、ちょっとした衝撃を受けただけでぐらぐらと揺らぎ、倒れかねません。逆に五本の柱が強固なら、どんな強風が吹こうとも、多少のダメージは十分修復可能です。その五本の柱とは、

- (1) 信仰告白
- (2) 礼 拝
- (3) 喜 捨
- (4) 齋 戒
- (5) 大巡礼 の五つです。

(1) 信仰告白

ムスリムになるのは大変簡単で、口で「アシュハドアッラーイラーハイッラッラー ワアシュハドアンナムハンマダンラスールッラー（アッラーのほかに神はなく、ムハンマドがアッラーの使徒であることを私は証言します）」と言えばそれだけで十分です。

この「証言する」に相当するアラビア語の完了形が「シャヒダ」で、その名詞形が、「シャハーダ（信仰告白）」です。なにかの免状、つまり証明書もシャハーダと呼ばれます。

ムスリムはなによりもまず口で、つまり口による行為によって信仰を宣言するのです。もちろん、神は私たちが秘める心の中もすべてお見通しの方ですから、敢えて声に出して信仰を明言しなくても神御自身はそれぞれの信仰の有無はご存知です。一方、私たちには人が心に何を抱いているかわかりませんから、ともかく口で表現したものを本心として受け止めるほかありません。「ラーイラーハイッラッラー」、心にもない信仰告白の言葉を口にする者があっても、そしてそれが虚偽の信仰告白であることが明白であっても、私たちはその言葉をとりあえずは受け入れ、その言葉を口にした者をムスリムとして遇し、たとえそれがムスリム戦士の剣の下で命惜しさに言われたものであっても、彼はムスリムとして命と財産と名誉の権利は保証されます。そして、このシャハーダの言葉と共にムスリムとなった者には残りの四つの義務が生じるのです。

(2) シャヒード

ムスリムがアッラーの道において殉死したなら、私たちは彼を「シャヒード」と呼びます。「シャヒード」とは、命をもって自らの信仰を証言した者、つまり、究極の信仰告白をした者ということです。普通、ムスリムが死ぬと水による全身洗浄を施し、白い布で包みますが、殉教者はそのまま包んで埋葬します。殉教者は一切の罪を赦されます。また、一度天国に入った者は二度と現世に戻りたいとは思いませんが、シャヒードは別で、これほどの報償が与えられるのならもう一度現世に戻って同じようにアッラー

のために戦って果てたい、と思うようです。また、クルアーンにも書いてありますが、アッラーのために戦って死んだ者は、私たちの目にはむざんな死を遂げたように見えますが、本当のところは死んではおらず、審判の日を待たずに一足先に天国に入り、アッラーの御許で生きている、ということです。

なお、アッラーの道における戦闘で命を落とした者はシャヒードですが、戦場でなくても疫病や溺死、圧死によって命を落とせば、それも殉教とみなされます。

(3) 証言すること

ムスリムの信仰告白は、「信じます」ではなく、「証言します」というものです。「信仰」はアッラーに向けた心の行為ですが、「証言」は自分以外の者に向けた宣言です。なにかを証言するには、それに先立ってその証言する事柄に立ち会っている必要があります。交通事故の証人になるには、その事故現場に居合わせていなければならないのです。実際、アラビア語の「シャヒダ」には、証言するという意味のほかに、「居合わせる」「立ち会う」という意味があり、動詞の第四形「シャーハダ」には「目撃する」という意味があります。目撃者でなければ、証言者にはなれないのです。

「アッラーのほかに神はないと私は信じます」と言うなら、それはあなたの個人的な思い入れでしょう、と反論されてもしかたありませんが、「アッラーのほかに神はないと私は証言します」と言うなら、個人的な思い込みではなく、「アッラーのほかに神はない」という事実は私が信じようが信じまいがすでに確定していて、私はその事実を事実として知っている、それが真実だとわが身を持って保証する、つまり自ら責任を取る、と宣言することです。

(4) 目撃証言

私たちの五感ではアッラーは捉えられません。知覚できないアッラーをどうやって目撃し、その目撃証言をすることができるのでしょうか。

私たちは、太陽がさんと輝いている日には、窓から首を伸

ばして太陽を目で確認しなくても、太陽が出ていることがわかります。外が明るく、お日様の光が家の中に差し込んでいれば、それだけで今日は晴天だとわかるのです。アッラーも同じです。私たちにはアッラーご自身の姿を捉えることはできませんが、アッラーの存在を証明する紛うかたない印は目の前に、そしてさらには自分自身の中に満ち満ちているからです。普通の日本人が「自然」と呼ぶもの、つまり自然に何者の手も借りずにできあがったと信じている自然界のすべてがその作者であるアッラーを言外に指し示しているのです。

あるとても敬虔な人が、「私は真の信仰者として朝を迎えた」と言ったときに、「なにをもって真の信仰者と言うのか」と尋ねられて、「私は楽園の住民が嬉々として互いを訪ねあうのを目にするようだ。また、火獄の住民が劫火に焼かれて泣き叫ぶ様を目にするようだ。それでこうして昼は齋戒し、夜は礼拝に立って過ごすのだ」と答えたという話が伝えられます。「神を信じる」とは、人間の知覚を遙かに超えた神をあたかも目の前にするかのようによく畏怖と感謝の念と共に神の命に服して生きることなのです。

(5) 最初の証言

私たちの五感ではアッラーを捉えることはできない、と言いましたが、それは私たちの肉体に付随する視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚の五感に限ったことです。私たちがこの肉体を受け、この世に誕生する以前、まだ胎児としても存在しないはるか以前、私たちの大父祖であるアダムに魂が吹き込まれるよりもまだ以前に、将来彼の子孫として存在することになる全人類の最後の最後の一人までがアダムの腰から引き出され、「確かに私たちはあなたが私たちの主であることを証言します」と答えているのです（クルアーン第7章[高壁]172節）。この出来事は私たちの記憶には残っていませんが、それが私たちの最初の証言です。今私たちがこの世に生を受け、アッラーのしもべとして日々を送るのは、このときの証言を身をもって実証するためのものですから、実のところ私たちには、「神がいるとは知らなかった」と言い訳をすることは

できないのです。

『アッラーは、彼のほかに神はないと立証し給い、天使たちも、そして、知識を持った者たちもまた』(第3章[イムラーン家]18節)とクルアーンでは言われていますが、アッラーのほかに神はいないことの最初の証言者はアッラーご自身です。ついで、見えない世界でアッラーにお仕えする天使たちがこれを証言しますが、三番目に証言者として挙げられているのは、人間のうち「知識を持った者たち」です。ここでも、信仰者は見えない世界のことを信じた者たちではなく、啓示の書を通してその知識を得た者として言及されているのです。

(6) 証言者としての資格

証言者に求められる資質は、なによりも誠実さです。イスラームでは嘘を述べることは殺人や姦通よりもさらに深刻な罪です。なぜなら、殺人も姦通ももう二度としませんと誓えば一応その言葉は受け入れられるでしょうが、嘘つきの言葉はそれ自体が虚偽である可能性を退けられないからです。ですから、私たちムスリムは、シャハーダという真実の言葉を口にするこの口を虚偽で汚すことは決してあってはならないのです。

ある男がムスリムになりたいとやって来ました。彼は盗みを常習とし、姦通を犯し、酒に酔い、嘘ばかりついていました。そうした悪癖をやめられそうにない自分にはムスリムになる資格はないだろうか、と相談したところ、そのうち一つぐらいはやめられないだろうか、と言われました。すべては無理でも一つならなんとかなるだろう、そう思った男はそれを承諾し、中でも一番容易そうな「嘘をつく」ことを止めることと引き換えにシャハーダをしました。その晩、男はいつものように日が暮れると盗みに出ようと思いつきました。そこで彼は自分自身に言いました、「いや、待てよ。嘘はつかない、と約束したが、明朝、おまえは昨晚盗みに出ただろう、と問われたらどうしよう。嘘は言えないから盗みをした、と白状しなければならぬが、そうしたらイスラームの掟に従って処罰を受けることになる。となると、それは困ったこ

とだぞ」。そう思った男は盗みを断念しました。姦通をしようと思ったときも、酒を飲もうと思ったときも同様でした。こうして男は「嘘をつかない」という約束をただけで、結果的にそのほかの悪癖からも身を引くことができたということです。

また、誠実であるとは、口で言うことと実際に行うことが一致していることです。もちろん、意図的に真意を偽ることは論外ですが、私たちは知らず知らずのうちにアッラーに対し不誠実をなしているかもしれませんからよくよく注意が必要です。

(7) 審判の日の証言者

ムスリムは死後、アッラーの御前に引き立てられ、生前に行った善行も悪行もことごとく清算を受けます。その日を審判の日と呼びますが、その日の呼び名はほかにもいくつもあり、その一つが、「立ち会いの日（ヤウムン マシュフード）」（クルアーン第 11 章〔フード〕 103 節）です。何の立ち会いを受けるのかというと、己の善行と悪行を逐一書きとめた記録天使、あるいは、それらをなした手足、さらには善行なり悪行なりの行為そのものです。生前報われることなく生涯を終えた善人であっても、あるいは存命中は報いを受けることなく切り抜けた悪人であっても、死後にはきっちり清算をうけます。審判の日、不当な扱いを受ける者は誰一人ないのです。悪人は己の悪行を否定しようにも口は利けず、さらには手足、そして皮膚までもが己の隠したい悪事を証言します。一方、信仰者については、彼が礼拝に立った大地、礼拝のために通った道までもがその善行の証言をするでしょう。

(8) 礼拝（サラール）

シャハーダ（信仰告白）をしてムスリムになった者には五行の残りの四つが義務となります。その第一がサラールです。サラールは言うなれば、他の四本の柱によって建つ建物の大黒柱です。あるいは、別の比喻を用いるなら、自動車を動かすガソリンの補給です。どんなに性能の良い車でもガソリンの補充がなければやがて動きを止め、動かなければ埃を被り、やがては錆付いてしまいますが、

ムスリムの信仰も同じです。私たちを創造主であらせられるアッラーとつなぎ、私たちのもろもろの崇拜行為を支えるアッラーからのエネルギー補給を受ける手段、それがサラアです。

私たちの信仰は心にもみ留められるものではなく、身体を用いた具体的な行為による裏づけが不可欠ですが、礼拝も同様です。アッラーに対する祈りもまた、心だけでなく体によって捧げられなくてはなりません。霊と肉、その二つが合わさって初めて人間だからです。私たちの心がアッラーに祈りを捧げるように、私たちの四肢、さらには細胞の一つ一つがアッラーのしもべとしてアッラーに崇拜を捧げ、アッラーの崇拜に用いられることを待ち望んでいるのです。

(9) 礼拝（サラア）と跪拝（サジダ）

ムスリムの礼拝は、心で捧げられるだけでなく、五体を用いて行われます。出家した仏弟子は仏に対する帰依の表現として五体投地を行います。同様に、カトリックの修道士の祈りにも地面に額づく祈りのポーズがありますが、ムスリムは特別な立場や特別な場所・機会に限らず一般の信仰者が毎日の礼拝においてどこであろうと、王であろうと乞食であろうと等しく額を地面に付けて祈りを捧げます。神は大地のいたるところを礼拝場所として清められたのです。

跪拝は人間がとり得る最も謙虚な姿勢です。ムスリムは、己の身を最も低くしたとき、最も高貴なアッラーに最も近づくと考えます。最も切実な願い事のある者が土下座してお願いするのと同じです。ムスリムは、直立してアッラーに祈り、前屈してアッラーに祈り、土下座してアッラーに祈り、そして、正座してアッラーに祈ります。そうやって体のすべての部位を用いて祈りを捧げるのです。

クルアーンの中には、審判の日に跪拝を命じられ、跪拝しようも背が曲がらず跪拝ができない者たちについての言及があります（クルアーン第 68 章〔筆〕42、43 節）。また、クルアーンの中には該当の節が読まれると、それを読誦した者も聞いた者も一斉に

サジダ（跪拝）する箇所が十数か所あります。そして、跪拝の跡がついた額は火獄の猛火も焼くことができない、と言われます。なお、最初の間が創造された後、最初に犯された罪、最初の逆行行為はシャイターン（サタン）による跪拝の拒絶でした。

(10) 一日五回のサラール

サラールとは信仰者のエネルギー補給だと言いましたが、私たちは身体にエネルギー補給を行うために一日に数回食事を取るように、霊的な糧を得るためにも日に数度礼拝を捧げる必要があります。

人は自然界の目覚めと共に起き上がって礼拝し、太陽が最も高い位置に昇りきると礼拝し、太陽の作る物影が物よりも長くなると礼拝し、日が沈むと礼拝し、そして自然界が眠りにつくとき礼拝します。つまり、太陽の動きに沿って太陽の創り主であるアッラーに感謝と賛美の祈りを捧げるのです。

イスラームのもろもろの義務行為は大天使ジブリールが使者となってアッラーの命令を伝えたものですが、礼拝だけは別です。礼拝の命令はジブリールを介さず、大天使ジブリールすら立ち入ることのできない領域に人類の代表であるムハンマドが足を踏み入れた際、直接アッラーから言い渡されています。そのとき礼拝の義務は日に50回と定められました。しかし、預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の度重なる懇願によって五回にまで減らされました。イスラームでは一つの善行は十の善行と数えられますが、ムスリムが捧げる礼拝もまた、わずか五回でその十倍の礼拝に相当するものと気前良くもアッラーはみなしてくださるのです。

(11) 審判の日とサラール

審判の日、私たちの行状はアッラーのお赦しと寛大なる目こぼしがあれば別ですが、原則的には逐一清算を受けます。その清算を真っ先に受けるのが義務の礼拝です。そしてそこに不足が認められれば、アッラーの御慈悲によって自発的な礼拝をもってして

を捧げるだけでは十分ではありません。日中忙しく立ち働くその最中にこそ手を止め、心を休めて神を念じるわずかな一時を持たなくてはならないのです。

(13) サラーと罪の浄化

私たちムスリムが一日に何度もサラーをするのは、霊的なエネルギーを補給し、恵みに感謝し、加護を祈るためだけではありません。一日五回のサラーは、ちょうど一日五回水浴びをする身体が清潔なように、その都度心の穢れを洗い流してくれます。預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の言葉に、一心にアッラーを念じて礼拝を捧げた者はちょうど生まれたばかりの赤ん坊のように罪から清められるというものがあります。また、厳罰に値する罪を犯したことを告白した者に対して彼は、「今、（義務の）礼拝をみなと一緒にあげたか。ならば、罪から清められた」と言われたとも伝えられます。

礼拝をあげる前にムスリムは水で顔と手足を清めなければなりません。預言者ムーサーは神の宮に近づくにあたって水で手足を清めるよう命じられたことが聖書には書かれています。アラビア語では礼拝に先立つ洗浄をウドゥーと呼びますが、そのウドゥーにも罪の浄化作用があります。ウドゥーで滴り落ちる水と共にそれぞれの部位からその部位によって犯された罪もまた洗い流されるというのです。汚れは付いたときにすぐ洗い流せば簡単に落ちますが、時間が経つとこびりついて落ちにくくなります。心の汚れも同じです。こんな少しばかりの汚れなど放って置いても後でまとめて洗えば大丈夫、と洗浄を後回しにすると、いつの間にか汚れが汚れを呼び全体が薄汚れ、汚れは染み付いてしまいます。私たちは知らず知らずのうちに罪をなしていますが、その小さな罪を小まめに清めるもの、それが一日数回のウドゥーであり、礼拝なのです。

(14) 礼拝（サラ）と祈り（ドゥアー）

サラとは祈願のことですが、ムスリムの祈りには大きく分けて二種類あります。一日に五回あげるように義務付けられたサラの基本はアッラーへの賛美の祈りです。礼拝にはクルアーン読誦、特にその第1章「アル＝ファーティハ」の読誦が不可欠ですが、「アル＝ファーティハ」の冒頭も、「およそ称賛はアッラーに帰される」とアッラーへの称賛に始まります。

クルアーンの読誦は立礼の状態でのみなされますが、屈礼、平伏礼なども基本的にはアッラーへの賛美に終始します。

一方、ドゥアー（祈願）は基本的にサラとは別にサラの外で捧げられます。礼拝の中でも「アッラーよ、なになにをなし給え」という祈願はなされますが、私たち日本人がイメージする祈り、つまり神への「お願いごと」はサラとは別物です。「アッラーよ、お塩が切れました。お塩を下さい」、そんな日常の些細なものを求めることも構いません。私たちが手にするすべてはアッラーからもたらされるからです。大きなことから小さなことまで、一般的なことから個人的なことまで、また、宗教的なことから世俗のことまで、ありとあらゆることをアッラーに祈り求めることが可能ですし、また、そうすべきです。

なお、サラの中のドゥアーは原則的にはそこにおいて預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）が唱えられたと伝えられるアラビア語の定型のドゥアーです。一方、サラの外であげるドゥアーには、伝承に基づいた定型のドゥアーと、自国語で心のままに表現するドゥアーがあります。もちろん言うまでもなく、アッラーはどんな言語であげられた祈りも聞き届けてくださいます。

(15) サラと祝福祈願

サラは基本的にはアッラーへの称賛に終始しますが、必ず読み上げられる定型句として預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の祝福祈願があります。ムスリムの信仰告白の言葉には、アッラーのほかに神はない、というアッラーに対する信仰表明に並べて、ムハンマドはアッラーの使徒であるとの証言が続きますが、

ムスリムはアッラーへの賛美からなるサラールにおいても座礼の中で信仰告白の言葉を唱えた後、預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）に対し祝福祈願を捧げます。実際、アッラーはクルアーンの中で預言者ムハンマドに祝福祈願するよう命じ、また、アッラーを愛するのなら自分に従うよう命じよとアッラーは預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）に命じておられるのです。なによりも多神教（アッラーに並べてほかの神に崇拜を捧げること）を嫌うアッラーが、御自身の称賛に終始されるべき礼拝の中において預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の祝福祈願の挿入をお許しになったことは、どれほどアッラーが預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）を高く評価しておられたかを如実に物語るものと言えるでしょう。

(16) サラールとアラビア語

サラールは初めから終わりまでアラビア語で行われなくてはなりません。アラビア語を母国語とする者にとっても母国語としない者にとってもそのことは変わりありません。なぜなら、アラビア語はアッラーがクルアーンをそれによって啓示し給うた言語、つまりアッラーがそれによって人間に語りかけ給うた御言葉だからです。

もちろん、アラビア語を外国語とする者にとってアラビア語で祈りをささげるのは容易なことではありません。しかし、自在にアラビア語を操るからと言って、預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）から伝えられた読誦法を学ばなければクルアーンを読むことはできませんし、流暢に読むことができればもちろんその報償は小さくありませんが、アッラーの命令に従って読み慣れない外国語をたどたどしく、つかえながらも一所懸命読めばその努力の分だけアッラーはたっぷり報いてくださいます。

アッラーはなにより、私たちムスリムに、私たちの主アッラー御自身の言葉を自らの口から発するという栄誉を与えてくださっているのです。

なぜアッラーとの対話にアラビア語が用いられなければならない

いのか、なぜ特定の言語で祈りを捧げなければならないのか、その理由は私たちには隠されていますが、そうすることで同じ一つの神を信じる者としての連帯感と結束は間違いなく強められているでしょう。

ムスリムの中にはアラビア語を母国語としようがしまいが、クルアーンをすっかり諳んじる人がいます。そもそも「クルアーン」とは「読まれるべきもの」というような意味で、天に原本があると考えられ、一冊の書物としてまとめられるまでは人々の心に刻み込まれていたものでした。

(17) 集団による礼拝

ムスリムに課された五行はどれもアッラーに捧げられる崇拜行為であると同時にムスリム間の同胞意識の強化、同胞間の関係強化に役立ちます。たとえば、シャハーダは神とのいわば契約ですが、それと同時にムスリム共同体への参入宣言です。ムスリムになった者には礼拝の義務が生じますが、それにはどのように礼拝を捧げるべきかを教え示す先輩ムスリムの存在が不可欠です。イスラームの信仰は日本人の多くが考えるような個人的な信念でも、心の内に留めおくべきものでもなく、ムスリムになると同時に身体表現、そして同胞との横のつながりが必須となるのです。

同様に、サラアにも純粋にアッラーに捧げられる崇拜行為としての側面だけでなく、同胞愛を強化する側面があります。なぜなら、基本的に（男性においては）義務の礼拝は集団で行わなければならないからです。礼拝の時間になるとイスラーム圏では「礼拝に来たれ」と礼拝への呼びかけがなされます。もちろん、義務の礼拝にはそれぞれ次の礼拝時間までの有効幅がありますが、早ければ早いほうが報償も大きいですからイスラーム圏に住むムスリム男性は、礼拝の時間となり、礼拝への呼びかけを聞くや、その時何事かに従事していた手を止め、水の浄化を施すと礼拝に向かいます。ムスリムには自分の所属する教会、あるいは定番の席のようなものはありませんから礼拝の度、立ち位置は変わり、隣に立つ同胞も変わります。見ず知らずの同胞、礼拝を後にしたらもう

二度と会うことがないかもしれない同胞とも肩を並べ、人肌の温かさを感じながら同じ動作で同じ方向に向かって同じ神に祈りを捧げるのです。

(18) サラーと導き

サラーにはクルアーンの読誦が不可欠ですが、中でもクルアーン第1章アル＝ファーティハ章はその読誦を欠いては礼拝が成立しないほど重要な章で、ムスリムは一日に何度も、いや、一回の礼拝に何度もこの章を読みます。アル＝ファーティハはアッラーへの賛美に始まりアッラーに対する祈りに終わります。日常のすべてにおいてアッラーに依存することを知ったムスリムはあらゆる場面においてアッラーに祈りを捧げますが、中でも最も重要な、つまり最も優先されるべき祈りが導きを求める祈りです。

アル＝ファーティハは、「どうか、我らをまっすぐの道にお導きください」という祈りで終わっています。「まっすぐの道」とは、言うまでもなくイスラームの道ですが、イスラームの道に導かれれば、それで導きが完了するわけではありません。イスラームの道に導かれることは大切ですが、それよりもさらに大切なのは、その導きの上に留まり続け、歩みを先に進めることです。ムスリムとなること以上にムスリムであり続け、やがてムスリムとして死を迎えることのほうが重要であり、それにはさらなる導きが必要なのです。アッラーの導きによってイスラームの道に導かれたムスリムは、今自分がムスリムであることは自分の意志や選択によるものではなくアッラーの恵みのおかげであるという思いを日に日に強めます。私たちの心から信仰が消えることなくムスリムとして朝を迎えることができるのはひとえにアッラーのおかげからです。そして、そのことを知れば知るほど、なおさら切なる思いでその導きが生涯を通して続くよう心を込めて毎日毎日この祈りを繰り返すのです。

(19) サラーとアッラーとの対話

ムスリムに五回の礼拝が義務付けられたのは、預言者ムハンマ

ド（彼に祝福と平安あれ）がアッラーの側近であるジブリールですら立ち入ることのできない天の領域にひとり足を踏み入れられたときでした。そのとき彼は天に昇り、これ以上ないほどアッラーに近づき、そこで五回の礼拝の義務を賜ったのですが、この夜のことをアラビア語で「ミウラージュ（昇天）」と言います。そして、普段ムスリムが捧げる礼拝は、「信仰者のミウラージュ」だと言われます。つまり、アッラーと親密な語らいをするために私たちの魂は日々アッラーの御許に駆け上がるのです。

ムスリムは特定の面会時間が定められていますが、もちろん時間外でもアッラーはいつでもどこでも私たちの祈りを聞いてくださいます。サラーには所定の形態がありますが、祈りはどんな時でも、どんな姿勢でも、またどんな状態にあっても構いません。

なお、サラーには「アル＝ファーティハ」の読誦が不可欠ですが、「アル＝ファーティハ」は信仰者がアッラーに捧げる一方的な祈りではありません。アッラーは私たちが読み上げる「アル＝ファーティハ」の一節毎、「わがしもべがわれを称えた」などと応じてくださり、導きを祈って読誦を終えると、「彼には彼の求めたものがある」と仰せられるのです。つまり、アッラーとの親密な対話を望む信仰者は、その都度礼拝に立てばいいのです。

私たちはサラーの最中は最優先すべき御方と対話しているので、人から声を掛けられようと、電話が鳴ろうと返答は後回しです。言うなれば、魂はアッラーの許に馳せ参じているのですから、地上には不在なのです。

(20) サラーの効用

サラーはアッラーにしもべとして恭順の意を表わし、賛美と感謝を捧げるだけのものではありません。サラーはサラーを捧げる私たち一人一人に直接的な益をもたらすものです。なぜなら、サラーの義務は私たちの意識を常にアッラーに引き戻すからです。一つの義務の礼拝を果たした者は次の礼拝の義務が数時間後には生じることを意識の片隅に置きます。そうやって礼拝の義務があることを意識に留め、時間が来たらそれを果たそうと思う限り、

礼拝を私たちに義務付けたアッラーとそのアッラーが命じ給うた他の命令をもまた念頭に置くことになるからです。『礼拝は醜行と悪事を禁じる』（第 29 章〔蜘蛛〕 45 節）とクルアーンにあるのはまさにそういうことでしょう。礼拝の義務を果たす者であれば、自ずとその行いは正されていくものです。逆に、礼拝する者であっても礼拝が彼の悪行を止めなければ、彼は礼拝を捧げているとはいえません。

預言者（彼に祝福と平安あれ）にとってサラールはくつろぎの一時であり、慰めでした。「義務」というと重荷のような響きがありますが、ムスリムにとって礼拝は愛するアッラーとの楽しい語り合いの一時なのです。

(21) ザカー（浄財）

シャハーダしてムスリムとなった者にはまず礼拝の義務があることを知らせなければなりません。礼拝は信仰者には欠かせない霊的なエネルギーの補給源だからです。

さて、礼拝といういわばライフライン（命綱）をアッラーとつないだムスリムに次いで義務として生じるのはザカーです。ザカーとは要するに喜捨すること、つまり神に喜んで所有物を差し出すことですが、イスラームにおいては、金額も用途も自由采配に委ねられた自発的な喜捨と、金額も用途も定められた義務の浄財の二つがあります。義務の浄財は、一定額以上の財産を一年以上所有した者の金品、家畜、収穫物などの財産の 2.5% です。働いて得た所得に課税されるのではなく、そのうち生活費として費やし、さらに必需品以外の購入に費やし、それでもまだ手元に残ったものの 2.5% です。例えば 100 万円の貯えがあれば、そのうちの 2 万 5 千円を放出することが義務となります。各人が所有する財産は、義務としてそれに課せられたザカーを出さない限り、本来は人の手に渡るべき財産を不当に手元に留めたこととなりますから、罪を犯したことになります。あらゆる所有物は元を正せばアッラーの持ち物であり、人はそれをアッラーから一時的に信託されているにすぎないのです。アラビア語の「ザカー」には「浄化」

という意味がありますが、これはザカーを支払うことで手元に残った財産を自由に使っていいものに「清める」ということでしょう。

また、「ザカー」には「増加」という意味もあります。自分の所有する財産の一部を手放せばそれだけ自分の財産は減るような気がしますが、けっして減ったのではなく、むしろアッラーの御満悦を得ることによって現世においてはさらなる祝福があるでしょうし、来世においても十二分に報いられるでしょう。

(22) ザカーの受け取り手

義務のザカー（浄財）は一定期間以上手元に留めた一定額以上の所有財産に対して一定額課せられるものですが、ザカーの受け取り手はあくまでクルアーンでその対象と規定された者で、それ以外の者やそれ以外の用途のための喜捨は任意の喜捨、一般に「サダカ」と呼んで区別されるものを当てます。従ってモスクの建設費や維持費などにもザカーは用いられません。ザカーの受け取り手はあくまで「人」なのです。

ザカーの対象となるのは、クルアーン第9章〔悔悟〕60節に言及のある極貧者、貧者、ザカーの徴収、管理などに携わる者、入信や悪行の抑制、信仰の強化などが期待される者、奴隷・捕虜の解放、債務者、アッラーの道において戦う義勇兵など、そして、旅の途にある者の八種類の個人です。

なお、ザカーには、ラマダーン月の明けた日の合同礼拝までに支払いが義務付けられた「ザカートルフィトル（斎戒明けのザカー）」があり、ラマダーンの斎戒はこのザカートルフィトルの支払いをもって完了したとみなされます。ザカートルフィトルは、扶養者がその扶養家族の頭数だけ、その土地の主食（小麦、米など）で基本的にはその土地の貧者に手渡します。

(23) ラマダーン月の斎戒（サウム）

ムスリムは月の満ち欠けに従って時の推移を数えます。ですから固定的な太陽暦と違って毎年半月近く繰り上がっていくのですが、毎年イスラーム暦（ヒジュラ暦）第9月ラマダーン月のおよ

そ30日間、ムスリムは日中齋戒して過ごします。

今日、月齢は予め正確に算出できますが、イスラームにおいてはあくまで新月の「目視」でラマダーン入りと終了を決定します。ですから、ラマダーン入り当日の夜になるまで、果たしてラマダーン入りしたのかしないのかは確定せず、毎年ムスリムはわくわくどきどきしながら新月の確認を待つこととなります。

ラマダーンは単に食を断つだけの断食月ではなく、性行為なども日中は控えなければならないため、アラビア語の「サウム」は「断食」と言うよりは宗教的でもっと広い意味を持つ「齋戒」との訳語を当てたほうがいいでしょう。「サウム」の原形である「サーマ」という動詞完了形には、「控えた」という意味があり、それは特に飲食に限らないのです。

齋戒を実際に解くのは日中の飲食と性行為ですが、人の死肉を食べるに等しい行為とみなされる陰口によっても本人の気づかないうちにアッラーの許では齋戒を破っている可能性もあります。

ムスリムはラマダーン月の一ヶ月間ファジュル（日の出のおよそ一時間半前）からマグリブ（日の入り）まで飲食を控え、日没と共に食べ物を口にします。イスラーム圏では日没の礼拝のアザーン（呼びかけ）を聞くや一斉に控えていた飲食を再開するので、日没直前、帰宅に急ぐ人々で溢れかえった街の喧騒と、その後人々が食卓を囲む日没時の街の閑散とした様のコントラストはみごとなものです。また、ファジュルの礼拝の呼びかけがある直前までに飲食を終えなければならないため、ムスリムは深夜に起きて軽食を取ります。昔は太鼓を叩いて人々を起こして回る役目を負った人がいたようです。

(24) ラマダーンと齋戒の命令

ラマダーン月一ヶ月のサウムの命令はムスリムたちがマディーナに移住してしばらくしてから義務となりましたが、齋戒が義務付けられたのはムスリムが初めてではなく、以前から啓典の民、つまりユダヤ教徒とキリスト教徒は齋戒を行っていました。

ラマダーンの齋戒はクルアーン第2章〔雌牛〕183節において

が、ムスリムにとっては日中の齋戒と同じくらいに夜中の礼拝、クルアーン読誦が大切です。ラマダーン中は毎晩特別な礼拝を行い、一ヶ月をかけて全クルアーンを読了します。中でもラマダーンの最後の10日間の祝福は大きく、その中には「ライラトルカドル（威力の夜）」と呼ばれ、1000の月よりも良いと言われる晩があります。クルアーンがアッラーの許から地上の天に下された夜だということです。おもしろいことに、その晩がいつであるかは奇数日であることなどいくつかのヒントを除き人々には隠されています。そのためムスリムは「今日こそその日かもしれない」という思いをもって礼拝に励むこととなります。

(26) ラマダーンと善行

ラマダーン月は普段よりも善行が大きく報いられると言われるので、ムスリムは普段にも増して善行に励み、年に一度のザカー（義務の浄財）の支払いもこの月に行うことが少なくありません。また、善行の中でも食事を振舞うことは特に奨励され、サウムを解くための一口の水を供しても齋戒者と同じ報奨が得られると言われ、治る見込みのない病や高齢などの理由で齋戒できない者は代わりに食事を振舞います。

ラマダーン月はアッラーのご慈悲の扉が大きく開かれる月で、齋戒という崇拜行為を通してより一層アッラーに近づく月でもあるため、ムスリムは齋戒者の祈りは必ず聞き届けられるという預言者ムハンマドの言葉を信じて熱心にアッラーにドゥアー（祈り）を捧げます。

(27) 巡礼

ムスリムはアッラーに祈りを捧げるとき、一定の方向に向かって立ちます。世界中、どこにしようと、アラビア半島のマッカという町にあるアッラーの館カアバ神殿に心と体を向き直すのです。「カアバ」とは、キューブ、つまり立方体のことです。その名のとおり、カアバは辺がおよそ10メートルの空っぽの立方体で、普段は鍵がかかっていて、中を見ることはできません。その真上の

天にアッラーの玉座があり、大地はそこを始点に創られたと言われます。イスラームの教えがアラビア半島に広まる以前からカアバはアラブ人の多神教徒たちの巡礼の地で、マッカ（メッカ）はいわゆる門前町でした。つまり、カアバはその当時からアッラーの館とみなされていたのです。ただし、そこには多神教徒たちがアッラーの仲介者とみなしていた様々な神々の像が置いてあったということです。

もちろん姿かたちのないアッラーに、上下も前後もありませんが、上下、前後のある身体を持つ私たち人間のためにアッラーは礼拝に立つ際の方向をカアバと定めてくださったのです。ですから、ムスリムが礼拝をするときには必ずカアバの方角を探し求め、カアバ神殿のあるマッカの聖なるモスクでは、カアバを中心に円をなして整列します。ムスリムの義務の礼拝は太陽の動きに応じて捧げられますから、必ず世界のどこかで礼拝の時刻が到来し、絶えずカアバ神殿に向かって額づく者がおり、彼らが顔を向ける先、カアバはほぼ24時間そこに訪れ祈りを捧げる者が後を絶ちません。

(28) 大巡礼（ハッジ）その1

ヒジュラ暦（太陰暦）第12月は、ズルヒッジャ、大巡礼の月です。その月の7、8、9日、ムスリムはすべての体力、経済力のある者には生涯に一度は果たすようアッラーから課せられた五番目の義務を果たすため、期待と畏れを胸に世界中から結集し、普段どんな社会的立場にあらうと、金持ちであらうと貧者であらうと一様に縫い目のない二枚のバスタオル様の上下を素肌に纏い、無帽、そうり履きのこれ以上ない謙虚な装束（ただし、女性は平素通り）でアッラーの館に待るのです。そして、信仰者の先達イブラーヒーム（アブラハム）の故事を偲ぶ諸行事をこなしつつ、最も哀れな姿で懇願の日々を送るのです。三日間にわたる大巡礼の行程を終えたハージュ（巡礼完了者）達は、髪を落とし、カアバに列れの周礼をなし再訪を祈りつつマッカを後にします。巡礼の義務を果たした者は生れ落ちたばかりの赤ん坊のように罪のな

い状態で帰途に着くと言われます。

(29) 大巡礼その2

イスラームにはキリスト教のカトリックのような修道院制も仏教の出家制度もありません。信仰者はみな俗世に留まり、俗世の生活を営みながら崇拜生活を送ります。そのようなムスリムにとって俗世を離れ崇拜三昧の日々を過ごすのがハッジでしょう。いうなれば、一時的な出家です。巡礼者には一切の殺生が禁じられます。動物の狩猟はもちろんのこと、草木をむしることも控えなければなりません。何百万という巡礼者が一同に集うハッジにはトラブルが付きものでしょうし、疲労困憊の中で忍耐の限界に達することもあるでしょう。しかし、それらもみな貴重な修行の一部と捉え、アッラーによって自分が置かれた状況にじっと堪えればハッジの報償はそれだけ大きなものとなることでしょう。

なお、大巡礼(ハッジ)のほかに、ウムラと呼ばれる小巡礼もあり、こちらは特定の日に限らず数時間で全行程を終えることができるため24時間ウムラのためにカアバを訪れる者が後を断ちません。

(30) サラーと五つの柱

ムスリムに課せられた五つの義務とサラーをみると、五行の要素がすべてそこに含まれることがわかります。

まず、ムスリムは毎回礼拝の度に「アッラーのほかに神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒であることを私は証言します」という「シャハーダ(信仰告白)」の言葉を口にします。また、サラーは「アッラーフアクバル(アッラーはより大きい)」という言葉と共に俗世を一時的に我が身に断つわけですから、言うなれば「サウム(齋戒)」です。そして、それは罪を清める「ザカー(浄め)」でもあります。また、礼拝に立ったときムスリムは身体をマッカの方角を向け、心をアッラーに向けますから、「ハッジ(大巡礼)」だということもできるでしょう。サラーは私たちの魂に不可欠なエネルギー補給だといいましたが、そこにムスリムの義務である五行の要素のすべてが盛り込まれていることからしても、ムスリ

ムにとってサラールがどれほど重要かは察せられるでしょう。

以上、ムスリムに課せられた五つの義務について解説しました。この五つの義務については預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の次の伝承を紹介して終わりたいと思います。アルハムドリッラーヒラッピルアーラミーン（諸世界の主アッラーに称賛あれ）。

ある男がアッラーの御使い（サッラッラーフアライヒワサッラム）に尋ねて言った、「定めのお礼拝をし、ラマダーン月を断食し、許されたものを許し、禁じられたものを禁ずれば、それ以上のことは何もしなくても楽園に入るとお考えですか」、すると、「はい」と言われた（「40のハディース」から、第22のハディース）

「続・やさしいイスラーム講座」 2007.3.3

～ムスリムに課された5つの行い～

著者：ハビーバ中田香織
ムスリム新聞社

【この冊子の問合せ先】

☎170-0005 東京都豊島区南大塚 3-42-7

宗教法人 日本イスラーム文化センター

E-mail : info@islam.or.jp